

稲むらの火

(Fire in the Haystacks)

1



<紙芝居の由来>

このお話のものはLafcadio Hearn (1890-1940、日本帰化名、小泉八雲)の著作に見られます。後に、それを小井常蔵氏(1907-1994)が「稲むらの火」という短編に書きなおしました。この「稲むらの火」は戦前から戦後にかけて(1937-1947)、小学校の国語の教科書に使われ、今日では津波防災教育のための優れた教材として知られています。

2



「やれやれ今日もよく働いた」

庄屋の五兵衛は一日の仕事を終えて、小高い丘の上にある我が家に着きました。

「今年は例年になく豊作だな」

とつぶやきながらお茶を飲み、疲れをいやそうと一服を入れていました。

3



その時、にわかにはりがきしんだかと思うと、五兵衛のかやぶきの家全体が強くあおられるようにしてごうと揺れました。

「これはただごとではない」

五兵衛は一目散に家から走り出しました。今の地震はさほど大きいというものではありませんでしたが、長くゆったりとした揺れ方と、うなるような地鳴りは、老いた五兵衛にとっても経験したことがないことでした。

4



五兵衛は自分の家の庭から心配げに下の村を見渡していました。村では豊作を祝う宵祭りのしたくに気をとられて、誰も地震には気がついていませんでした。

「これはどうしたことが」

丘の上から海のほうを見ていた五兵衛は、あまりの光景に言葉を失ってしまいました。なぜならば、風とは反対に、波が沖へ沖へと引きはじめ、海岸に広い砂浜が見えてきたからです。

「大変だ！ 津波がやってくるに違いない！」

五兵衛はとっさにそう感じました。このままにしておいたら、浜辺にいる村人四百の命が村もろともひとのみにされてしまいます。一刻の猶予も許されません。

5



「そうだ！」

考えがひらめいた五兵衛は家につけこみ、まきを一本手に取ると、いろりから火を移してたいまつを作りました。そして、それを片手に外に飛び出していきました。

6



目の前には刈り入れたばかりのたくさんの稲むらがつんでありました。

「もったいないが、これで村中の命が救われるのだ！」

五兵衛は意を決しその稲むらのひとつに火をつけました。

7



火はおりからの風にあおられてどんどん広がっていきました。五兵衛はひとつ、またひとつと稲むらに火をつけて回りました。こうして自分のすべての稲むらに火をつけ終わると、たいまつを捨てて沖のほうを跳めていました。
あたりは日が沈んだこともあり、すっかり暗くなっていました。そんな中、稲むらの火はポウポウと燃え広がりました。
この火に気づいた山寺では、火事を知らせる鐘を鳴らしました。

8



「鐘だ... 火事か... ?」
浜辺の村人たちは祭りじたくの手をとめて、あたりを見回しました。そして山手に目を向けた村人の一人が赤い炎に気づきました。
「火事は庄屋さんの家だ！」
「こうしちゃいけない。みんな！ 庄屋さんの家に急げ！」
村の男たちは大急ぎで山手へかけだしました。続いて老人、女性や子供も、男たちの後に続いていきました。

9



そのころ丘から見下ろしていた五兵衛は、村人の到着をいまかいまかと待っていました。やっと、二十人ほどの若い男たちがかけ上がってきました。
「庄屋さま、早く火を消しましょう！」
男たちはいいました。ところが五兵衛は大声で、「ほっておけ！ 一大事だ。村人みんなにここに来てもらうのだ！」
と火を消そうとする男たちをとめました。五兵衛のことばに若い男たちはとまどって、お互い顔を見合わせていました。
そのうちぞくぞくと村人が集まってきました。五兵衛はかけあがってくる村人たちを一人一人数えました。集まった村人たちは燃えている稲むらと、五兵衛の顔を不思議そうに見比べました。

10



その時、五兵衛は大声で叫びました。
「見る！ やってきたぞ！」
村人たちは五兵衛の指さすほうを見ました。遠く海のかなたに、細いひとすじの線が見えました。その線は見る見るうちに太くなり、こちらのほうへすさまじい速さで押し寄せてきました。
「な、なんだあれは？ ... !!!」

11



「つ、津波だ!!!」
と村人たちは口々に叫びました。海水が大きな壁のように目の前に迫ってきました。そして山がのしかかってきたような重さと、雷が落ちた時のような大きな音で陸地にぶつかりました。
人々はわれを忘れて後ずさりしました。雲のように山手に突進してきた水しぶきのほかに、一時、何物も見えませんでした。

12



村人たちは、自分たちの村を飲み込む、荒れ狂った海をただ見ていることしかできませんでした。
二度、三度と村の上を白い海が進み、また引いていきました。
丘の上では全員があっけにとられて、ただ呆然と村を見渡していました。

13



朝の日の光とともに はじめてわれに帰った村人たちは、すでに燃えてしまった稲むらの火を思い起こしました。そして、その火によって救われたのだと気がつく、なにもいえないまま五兵衛の姿をずっと見つめていました。

14



<一言>

この物語では津波が来る前に海水が沖の方に引いていますが、実際の津波ではこの引き波が現れないで、いきなり高い波（押し波）が海岸を襲う場合がありますので注意しましょう。また、最大の波は津波が何回か押し寄せたり、引いたりした後に来る場合もありますので油断はできません。